

「2025 年度東アジアジュニアワークショップ参加報告書」

京都大学教育学研究科 修士1年 栗田朋香

1. 学習成果

本プログラムを通じて得た最も大きな学びは、英語での研究発表と質疑応答の経験である。私にとって初めての海外渡航であり、かつ英語での研究発表という初挑戦であったため、大きな緊張と不安があった。しかし、発表前日まで先生方に丁寧な指導をいただき、スライド構成から話し方、想定質問への対応まで細かく準備を重ねたことで、当日は落ち着いて発表を行うことができた。

質疑応答の場面では、予想外の質問に即興で英語で答える難しさを痛感した一方で、研究内容への関心を示す質問を受けたことで、発表が伝わった実感とともに大きな自信につながった。また、他大学の学生や海外の先生方からのコメントを通じて、これまで日本国内の文脈に限定して検討してきた「障害児家族のあり方」というテーマを、国際的な視野から問い直す必要性を強く感じた。

日本社会特有の支援体制や母親規範に注目してきたが、国外でも家族の支援や障害理解に関して類似の課題や新たな視点が存在することを知り、研究の普遍的意義と比較研究の重要性を実感した。発表の過程を通して、自身の研究をより多角的に捉え直す姿勢を身につけられたことが大きな成果である。

2. 渡航先での経験

初日には開会式に続き、「東アジアにおける自動車電動化」をテーマとしたパネルディスカッションが行われ、活発な議論が交わされた。2日目・3日目には「若者の構造的不平等」「バリアフリー社会」「科学技術と社会」「教育とキャリアパス」など多様なテーマに基づくセッションが開かれ、各国の学生とともにディスカッションを行った。特に私の関心のある教育や福祉に関する議論では、日本での実践と比較しながら考えることで、制度や文化による差異を具体的に理解することができた。

4日目以降は国立台湾博物館や二二八平和記念公園の訪問を通して台湾の歴史的背景を学んだ。さらに立法院では現職の議員による講義を受け、台湾社会の政治制度や民主化の歩みについて知見を深めた。また、政治ドキュメンタリー映画『Invisible Nation』を鑑賞した。最終日には龍山寺の見学や、ホームレス支援団体、LGBTQ+支援団体の訪問を通じ、社会的マイノリティ支援の現場を知ることができた。五日間の研究発表・交流・現地訪問を通じて東アジアの社会課題への理解を深め、学問的にも文化的にも豊かな学びを得る貴重な機会となった。

3. 進路への影響

本プログラムへの参加を通じ、研究を国内にとどめず、国際学会での発表や海外研究者との共同研究を視野に入れるようになった。これまで自分の研究を日本社会の文脈に限定して考えていたが、他国の事例や異なる文化背景の中で自分の研究テーマを捉え直すことの重要性を学び、今後はより広いフィールドで社会課題の分析に挑戦したいと考えるようになった。特に、障害児支援や家族研究といった分野を国際的な比較の中で捉えることが、より普遍的な理解や政策提言につながる可能性があると感じている。